

# 「100歳蒸発」の

# モデルノロジー

この夏は、記録的な酷暑と高齢者蒸発のうすら寒さを残して去った。100歳以上に限っても数百人規模で生死さえ不明の事態は何を教えるのか。憂鬱なモデルノロジー（考現学）である。

## 飢餓状態10日・体重30キロ台

「家内が亡くなって、ある程度の蓄えはあったけど、私のわがままで、どうせ近いうちに家内のことへ行くつもりだったのが、蓄えもだんだんなくなってきた、仕方なく絶食して、このまま死んでもええわと思っていた。ガスも止められたし、水道も止められた。10日ぐらい食べてなかった。そこへ近所の人が、ちょうど衆議院選

挙の時に訪ねてこられ、その時に発見された。もうフラフラでした。立つのもやっとだった。さっそくその人が民生委員の方に知らせてくれて、飛んでこられ、とりあえず弁当だけでも食べて、と弁当を持ってきていだいて、あくる日に社会貢献支援員さんや近所の方が来られ」

大阪府社会福祉協議会（社協）の「生計困難者に対する相談支援事業」の報告書は支援事例を満載している。この70代の男性は体重30キロ台までやせ細っていた、という。

## 制度と行政の空白を埋める

大阪府社協の老人施設部会には特別養護老人ホーム、養護老人ホーム

など432施設が加入し、04年度から、この相談支援事業を始めた。

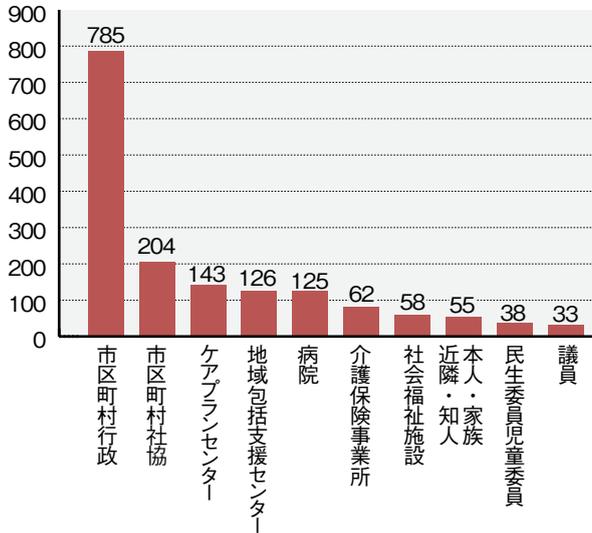
各施設が入所定員1人当たり年間最高4000円を拠出し、「社会貢献基金」を設ける（09年度は約7000万円）。経済的な援助も行う（現金支給は避け、家賃、水道光熱費の代払い、食材の提供等、10万円限度）。社会貢献支援員は独自のソーシャルワーカーで、各施設のコミュニティにあたる。大阪府の補助が5年間で打ち切られた後も支援事業は継続されている。

対象者は「高齢」「失業」「母子・父子」「生活保護受給中」「精神障がい」「身体障がい」等。援助内容は「水道光熱費、食材費」「家賃、転居費」「医療費」等。食べるものにもこと欠いて、家賃を滞納すると高齢者も乳児も強制退去の現実が浮かぶ。

「SOS」を中継して伝えるのは、

グラフ 主な依頼先 (10位まで、04～08年度)

大阪府社協の「社会的効果検証報告書」から(一部省略)



「市区町村」が最多、次いで「市区町村社協」「地域包括支援センター」など(グラフ参照)。行政自体がなぜ「SOS」を中継するのか。報告書は①生活保護の受給要件は満たさないが、担当職員も窮状を見過ごすわけにはいかないから②生活保護を受給可能だが、支給日までの生活費がない、などと説明している。

「夫は失業、妻は軽い知的障がい、その後3カ月の乳児を抱える、夫は再就職したものの給料日までのミルク代、お

### 家族・家庭と「匿名の「密室」

むつ代を1カ月援助(6・7万円)」「息子が父親の年金担保で借金、父親は家賃や治療費を滞納、養護老人ホームに入所決定したが、面接の交通費等、当面の生活費を援助(10万円)」「挟間」や「空白」を丹念に埋めていることが分かる。

対象者の家庭には貧困と社会的な

孤立が同居する。家族・家庭は時に社会から断絶した「密室」に陥る。社会貢献支援員らは、その家庭のドアをたたき、生活状況を聞き、同じ立場と目線で共に考え、支援方策を見出し、関係機関と連携を図る。100歳以上蒸発事件の底流にあるのも、やはり貧困と孤立の連鎖ではないか。父母の死を隠し、その年金を不正に受けていたケースの多

くも、人目を避け、交際を断ち、親なき後の再出発を相談する相手もない。

年金の「現況届」や住民基本台帳を点検し、医療保険や介護保険の保険料納付と給付を調べる。所在地や生死を確認し、不正の摘発にはなるが、やはり専門職がドアをたたき、そこから始めるほかない。

生活保護と民生・児童委員、地域福祉を担う社会福祉協議会、判断能力に乏しい人びとを支える成年後見、介護保険と地域包括支援センター…。メニューは揃っているが、法律と制度の硬直性や縦割りに寸断される。

大阪府社協の実践は、困窮者の「潜在化」を掘り起こし、困窮の「個別性」と「多重性」を見極め、「即応性」をもって対応する。この貴重な実践に最も頼った行政の代表、大阪府が補助金を切った。福祉行政の「貧しさ」の象徴ではないか。

■富武 剛(みちたけ たけし)

早稲田大学政経学部卒。毎日新聞社論説副委員長、埼玉県立大学教授を経て、現在「毎日」大学教授。近刊に「現代の社会福祉 1000の論点」(監修・共著、全国社会福祉協議会刊)。